

国史跡指定記念シンポジウム
「若杉山辰砂採掘遺跡」



辰砂を含む熱水脈は、石英脈や酸化鉄脈とともに累状伏状脈を形成しています。



パネルディスカッションのようす



弥生時代の交易を読み解いた大久保さん



赤色顔料を解説する本田さん

阿南市水井町にある若杉山辰砂採掘遺跡が、国史跡に指定されることを記念したシンポジウム(県・市主催)が9月7日、情報文化センターコスモホールで開催され、市民など約350人が参加し、古の阿南に思いを馳せました。

遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期(紀元前1世紀半ばから4世紀初め)にかけて、赤色顔料「水銀朱」の原料になる辰砂が採掘された跡地。この時代では、全国唯一、本市にしかない遺跡です。

基調講演では、徳島文理大学教授の大久保哲也さんが、遺跡の調査から弥生時代の交易を読み解きました。大久保さんは、「鉱脈を見つかったり、硬い岩盤から辰砂を採掘し加工したりするには、高度な技術が必要で、外部から技術者を集め、朱を交易品として生産し、流通させていたのではないかと指摘しました。

赤色顔料に詳しい九州国立博物館名誉館員の本田光子さんは、各時代や地域での赤色顔料の使われ方を紹介し、「赤色を埋葬などの重要な場面で使用していることから、特別な色として捉えていたのでは」と古代人の心情に迫りました。



地元の思いを語る柳沢さん



遺物を観覧(加茂宮ノ前遺跡講演会にて)

また、遺跡の歴史的価値や今後の活用を考えるパネルディスカッションが有識者など8人で行われ、文化庁文化財第二課の川畑 純さんは、全国の遺跡保護や活用事例を紹介。水井町総代でNPO法人加茂谷元気なまちづくり会事務局長の柳沢久美さんは、「遺跡は祖先からの贈り物。地域資源としてまちの活性化に生かしたい」と思いを語りました。

9月14日には加茂谷公民館で、本遺跡との関連が注目されている加茂宮ノ前遺跡を考える講演会が開催されました。今、全国の考古学の専門家やファンから阿南市に熱い視線が注がれています。

本市では、若杉山辰砂採掘遺跡の保護と整備活用について検討するための委員会を、来年度から設置する予定です。

遺跡を知ることは、私たちの祖先がその時代を生き、命を繋いできた「たくましさ」に触れること。その証を次の世代へと受け継いでいくことこそ、現在を生きる私たちに課せられた使命ではないでしょうか。